

豊御食炊屋姫天皇之御宇廿九年春二月己丑朔癸巳

上宮聖徳法王薨去

▲豊聡耳神子法王御遺影

○撮影

姫海棠はたて（「花果子念報」記者）



文章責任
水之江
めぐね
図画提供
妹尾在処

半斑夜鳩戸
百姓悉是長
之母在泣不
止以味既春
輝止天既春
是月地上既
于時高宮崩
薨高宮崩
太子薨高宮崩

ジレスサレテ以來
タフヤラ冗談ハ苦
手ニ成ツタ御様子
デアル
幼少ノ頃ヨリ勉学
ニ秀テ、ソノ字ノ
雅ナル事ハ甚タシ
ク、聖徳フオント
ハ未タ二僧侶尼僧
等手書キ經典業界
ノ知識人ニオイテ
随一ノ人気ヲ誇ル
書体デアリ、紛イ
物方後ヲ断タナイ
初陣ハ物部守屋ノ
妾デアルガ、實際
ニ為シタノハ兵役
ヨリハ仏像彫刻デ
アル。ソノ刀ハ人
ヲ斬ルヨリ迷イヲ
断ツ為タツタ。
崇峻帝方崩タノヲ
殺生ナリ

一躍政界ニ躍リ出
テ十七条ノ憲法、
冠位十二階ナドヲ
制定サレタ。
ソノ頃、屠自古郎
女トノ熱愛方発覚
シ婚姻スル。流石
ノ太子モ美女ニハ
弱カツタ、ト書イ
タラ怒ラレルタラ
ウカ。然シ蘇我ノ
眠リ姫ハ太子ノ口
ツケデモ目ヲ覚マ
サナカツタトハ、
実ニ勿体ナイ話デ
アル。イツソ筆者
ガ玉ノ興ニ乗リタ
イ位タ。
アツ、デスクー、
没タナンテソナ
殺生ナリ

太子ノ隠サレタ青春秘話！
『ハルモニ』

上宮聖徳法王薨去

水之江めがね

Jouguushoutokuhouou Koukyo
by
Megane Mizunoe
2011

Illustration Arika Seno
DTP moki

又 聖王 娶 蘇我馬古 叔尼大臣 女子

名 刀自_と古_{この}郎_{いらつめ}女_{めあわ} 生_な兒_こ山_{やま}代_{しろ}大_お兄_え王_{のみこ}

此王 有_あ賢_{けん}尊_{そん}之_の心_{こころ} 棄_す身_み命_{いのち}而_{して}愛_{あい}人_{ひと}民_{たみ}也_{なり}

後_{のち}人_{ひと} 与_よ父_{ちち}聖_{せい}王_{わう}相_あ濫_{らん}非_ひ也_{なり}

また、聖_{せい}王_{わう}、蘇_そ我_が馬_ま古_{この}叔_{すく}尼_ね大_お臣_{おのみ}が女_め子_{のこ}、

名_なは刀_と自_{この}古_{いらつめ}郎_{めあわ}女_{めあわ}を娶_{めあわ}して生_なみませる兒_こは山_{やま}代_{しろ}大_お兄_え王_{のみこ}。

此_この王_{わう}、賢_{けん}く尊_{そん}き心_{こころ}有_あり、身_み命_{いのち}を棄_すてて人_{ひと}民_{たみ}を愛_{あい}す。

後_{のち}の人_{ひと}、父_{ちち}の聖_{せい}王_{わう}に相_あ濫_{らん}るとい_いはあ_あら_らざる也_{なり}。

嗚呼、斑鳩いかるがが行く……。

望まれることなく、浮世から捨てられし彼らを動かすもの。

それは、生きる意志を持つ者の意地に他ならない。

我、生きずして死すこと無し。

理想の器、満つらざるとも屈せず。

これ、後悔とともに死すこと無し。

冬の日の長さにも耐え難くなったとき、神子^{みこ}は政務を早々に片づけて郊外へ赴く。男装のための付けひげをむしり取り、ひとりで馬にも乗らずに川べりへ行き、そしてあてもなく歩く。長い仕事の間にかわばっていた足の関節がほぐれてくる頃には、宮にこもっていたのでは見えない様々なことが見えてくる。たとえば空の色とはこのようなものであったのかと、長く家に閉じこもっていた病がちの人が思うようなことを、思うのである。

河原の砂利は足裏にほどよく当たる。なめし革の柔らかい靴をはいたままであったから、丸い川石の形までわかる。長い日に当たって暖まっていた拳大の石くれの上に足をのせると、そこに溜まっていた陽光の温もりがじんわりと伝わってきて、なんとも良い気分になる。初々しい春の、まだ冷えて締まった空気の中での、小さな春であった。

そうしたときに心中を去来するのは、今となっては歩むことも叶わぬ死んだ父のことであり、先に長い眠りにつけてしまった友人の布都^{ふと}のことであり、ゆえあって魂のみが身体から離れてしまっている妻の屠^と自古^{じこ}のことであった。

自分のみがこうして五体満足で生きていることについて、何とも言えぬ気持ちになる。こうしていて良いのか、こうしてることが正しいのかどうか、ということがそ

わそわと落ち着かぬ煙のようなものとなって胸中へざわめくのを、川面の流れゆく泡を見つめて落ち着けるのが常であった。

かしきやひめ おおきみ
炊屋姫が大王となり太平の世が三十年ほど保たれていた。あとひと月余りで、神子はこの世を去るつもりであった。

いかな天才といえども心中穏やかならぬのは、当然であった。ずいぶん前に自分で決めたことであったが、日が経つにつれて、今少し、もう少しという迷いが自ずと生じてくる。未だ人間の身を保っているからには致し方ない。身中に潜む気分の虫が騒ぎ出すのを、歩くなり、瞑想するなりしてなだめるのがこのところの日課であった。

岩の上に座して、水のほとほと流れていく有様を眺め、耳をまた澄ます。せいれつ清冽な水音にまじって、魚の僅かに跳ねる音や、沢蟹いわたの巖を抜けていく足音などが聞こえる。あるいは、天上高くとび鳶の啼いている音、風の吹く音なども。

あるがままの世というものを、心の内へじんわりと含ませては、また去らせる。この行いの狙いはこの世の姿に固執するものではない。己の五感を通じて、ただ一切が意識の内側を通り抜け、またどこも知れぬ場所へ去っていく一連の流れを感じる。

風に乗せて、遠くへ視覚を飛ばす。道教に親しんだ神子にとっては造作もない、とお遠眼鏡めがねの術であった。

宮の庭で、少年がふたり遊んでいる。一人はまだ幼く、蹴鞠もしくじってばかりだ。もう一人はそれを思いやるようにして時々蹴りやすいような球を放ってやるが、なかなかうまくはいかない。幼子おさなごはあと一歩というところで届かずに空振りばかりしてしまふ。

幼い方が、蘇我そがのいるか入鹿。屠自古とらよこの兄、毛人えみしの子である。神子にとっては義理の甥にあたる。

年長の方が山背やましろ。神子と屠自古の子ということになっている。神子も屠自古も女性であるが、世継ぎがないというのは世情を不安定にするということから、捨て子をこっそりと拾って世継ぎに仕立てたものである。

と、球を追いかけていた入鹿が転び、火でもついたような泣き声があがる。山背が駆け寄り、手をさしのべる。幼い手と手がつながる。すりむいた膝小僧を井戸水で洗ってやり、また遊びが再開される。

頬笑ましい光景である。常ならば。

だが神子の表情は冴えない。その先の近い未来のことを思うと、その暗澹たる心地は晴れないままであった。

道教によって得られた不可思議な力の中には、近い将来のことを見通す力も含まれ

ていた。

今からおよそ二十年と少しの後、立派な青年となった彼らは対立することになる。有力な豪族と皇族ということで権力争いに巻き込まれ、やがて山背が追いつめられて、一族もろとも斑鳩宮いかるがのみやにて自死することになる。入鹿もまた、血で奪った権力は長続きせずに深いうらみを残しながら死ぬことになる。

そのような行き先のことからこそ、神子の迷いは晴れない。この先、自分ももう少し長生きして彼らを見守り、指導してやればもっとうまくやれるのではないか。このように仲良く兄弟のようにして育った彼らが争い合うなどという、恐ろしい運命を避けることができるのではないかと。

だが、もう一つの大切な約束が神子の心を捕らえて離さない。

神子はゆっくりと元の自分の身体に意識を戻す。立ち上がり、そして一歩ずつまた歩き出した。砂利を踏みしめる音、風に混ざる枯れ草の匂い、水面から跳ね返る陽光のまばゆさ、一つ一つを自分自身の体と心とで感じながら荒涼とした冬の原野を行く。

川を離れ、小高い丘まで来る。人知れず葬られている友人に今日もまた会いに来た。背の高いすすきに埋もれるようにして、石がおかれていた。膝ほどもない大ききで、貴人のものにしてはみすぼらしくひっそりした墓である。物部の家は既になく、引き

継ぐ者は神子の他にはいなかった。いつ来ても静かなこの場所は、遠い昔に住んでいたあたりに似ている。

二十年ほど前に、斑鳩宮に引越してきてから、目まぐるしい政務に追われていたものの、一週間とおかずに様子を見に来ていた。

石の前に一つの香炉をそなえ、火口ほくちで育てた火をうつす。ほどなくして香煙が漂った。揺らめきたつ白煙の中、じっと視線を据えていると、その中にひとりの女が――妻、屠自古の姿が浮かびたつ。両足はないが、今、暗い宮中の部屋のなかで横たわっている屠自古の姿そのままの影が煙の中にうつりこんでいる。

これが、いわゆる反魂香はんこんこうというものであった。

道教に伝わる秘術であり、これを編み出すためには天才と名高い神子であっても天寿を削り、徳をすり減らせなければならなかった。そのために出来なかったことも数多あまたあるが、後悔するものではない。

神子はわずかに微笑んでみせる。煙の中の妻も優しげに笑う。何か言おうとして口を動かすが、声までは聞こえない。それでも神子は小さくうなづく。屠自古もまた満足げにうなづく。優しくいたわるような視線が心地よく、悲しみにささくれた心に安らぎを与えてくれる。

本来の反魂香は黄泉よみから魂の姿だけを呼び戻すものだ。屠自古は、三十年ほど昔、蘇我と物部の戦のおりに故あって犠牲となり、足を断ち切られ、こんこんと眠りについている。今なお、宮の暗い部屋でずっと眠ったままでいる彼女を。時折こうして魂だけ呼び戻してやり、目と目だけで会話をする。指先を伸ばしても触れることのできない妻の幻影を見ては、胸の内を甘い疼痛とうつうで満たす。

また、石の下には古い友人が眠っている。手で、石の下の柔らかな土を掘り起こす。爪に土が入り込むこともなく、容易に掘り進めることが出来る。指先から肘ほどの深さまで彫れば、堅い木の棺ひつぎに行き当たる。そっと開けると、少女の愛らしい顔がそこにある。死に顔とも、ただの眠りについているともつかない、安らかな表情を浮かべている。

誰も眠りについていない。

生きて動いているものは、自分だけだ。

ここから、生者達の都はほど遠い。荒涼とした原野の中に三人きりである。

神子は友人の——物部布都の、頬に触れる。凍えるように冷たい。触れればその冷たさにやっと死体であるということが判るけれど、わずかに押せば弾力を感じるほどにその肌はみずみずしい。

生前、頬に触れるときゅっと泣きそうな顔をしたものだった。それを思い出す。それは三十年ほど昔の記憶だ。遠い日には誰もが皆、子供であった。死んだ者は子供のままでいる。

生きている自分は、どうだろうか。秘術をもって、自分の身体の時は止めたままでいるけれど、要らぬ知恵は付き、日常の雑事に追われてしまっている。このようにして三人きりで荒野にいる時、はじめて自分は自分に戻れたような気がする。

目を細めて風の音を聞く。ごうごうと強い。繋がる手もなく、抱き寄せる温もりもない。指先は凍えてかじかんでいて、かすかに土の匂いがする。

それでも神子は微笑している。心は穏やかで安らいでいて、そしてほんの僅かに寂しい。ひとり静かにこれから先のことを思うと、とくりとくりと鳴っていた鼓動すらも抑え気味になって、自分の身体が土や風や川の水と同じ冷たく清冽なものと同列になるような心地がする。

この世の栄華はひとの身体を温めるが、時として心を濁らせる。布都が眠りについて後、何代か前の大王の後であった炊屋姫かしきやのひめを世継ぎの大王と為したは良いが、神子は太子たいしの座に祭り上げられてしまった。何度か断りを入れたが、馬子うまこも姫も譲らなかつたのでやむを得ずそうすることにした。

国の頂点近くまで上り詰めてみると、見えるものは増えた。見たくなくとも国の粗やほころびというものが見えてしまう。そうなれば、丁寧の色々なところまで手を入れたくなる。苦しんでいる人々がいて、争いの火種があればどうにかせずにはいられなくなる。そうして様々な仕組みや取り組みをしているうちに、気が付けば三十年あまりが過ぎてしまった。

「こんなに待たせるはずではなかったのですが」

ため息をついて語りかける。しびとは答えない。

余計なひとことだったと思い、また神子は沈黙を守る。

日だまりの中は心地よい。瞑目してその光を感じる。枯れ草の、陽に温められて香り立つ匂いは懐かしい。幼い頃から慣れ親しんでいた馬の飼葉を思い出す。

思い出した途端に、胸の奥がちりちりと焼かれる感じがした。神子は小さくかぶりをふって、それを退けた。悔恨は、今のこの場には相応しくない。先の戦乱は既に過ぎ去ったのだ。そのせいで妻が傷つき、友人が眠りについたことについて、今は思うべきではない。

冷たく澄んだ空気を吸い、また吐く。冷えていたものが、温められて排出される、その一連の動きはこの冴えた大気を汚しているようで、ひどく申し訳なくなる。けれ

ど生きている限りにおいては、ひとは息をしなければならぬ。

一度死んで蘇ったならば、そのようなこともなくなるのだろうか。判らない。布都は、死んでから再び生き返り、尸しかいせん解仙となることを約束して眠りについた。

だが、はたしてそれは本当に生きているということなのだろうか。死体が動いているということとはどう違うのだろうか。神子には判らなかつた。

けれど疑う理由もない。

そして疑うわけにもいかない。

その二つの語句の微妙な差異について、神子は考えないようにする。布都は、神子を信じて眠りについた。信じられた側はそれを裏切るわけにはいかない。神はややすすと人を裏切るけれど、自分は布都を裏切るわけにはいかない。そのようなことをすれば、神子自身が自分を信じるのが出来なくなってしまうだろう。

一つまた強く息を吐いた。心の中の雑念を追い払う。

鳥の声に耳を澄ます。ごく遠くで鳶が鳴いているのが聞こえて、見上げる。風を翼に受けてゆったりと青い空を舞っている。鳥はどこまでも高く飛び、その軌道は揺るぐことがない。そのままゆさに目を細めると、涙が出そうだった。天の日も鳥も、地の草も風も、どれもがあるがままの自分である。自分というものを判ってそのように

振る舞っている。

自分が何者なのか、どのように在るべきかと悩むのは人間ばかりだ。

どのように在れば、人間らしいかと思いを巡らすのは人間だからだ。

心持ちを落ち着けて自然の流れの中に気持ちをしませる。空気の流れを感じ取り、その中に自らの息吹を載せる。声を出さずに数をかぞえて、ただ心の中から流れてくる思い出を載せて息を吐き出していく。そうして自分の中に凝こもっているものを吐き出してしまえば、最後に本当に大切なものが残る。そのはずだった。

「布都、君は生まれながらの策士だったと思いますよ」

声を出すのは生きている者だけだ。自分が場違いな者であることをもう一度思い出す。

それでもそうやって独語して吐き出してしまえば、自分の内側は綺麗になる。よりいっそう死んだ者に近づくことが出来るのではないか。神子はそう思った。

「君は小さくて弱くて、そのくせ一生懸命で守らずにはいられたなかった。わたしだって屠とら自古こだってそう感じた。それを策士と言わずにどう言えればいいでしょう。君の兄君、守屋もりやだって、仮初めの夫であった馬子だって、本当は君のことを守りたかった。ただ、どうやればいいのか判らなかつただけです」

まぶたの裏に浮かぶのは遠い日の思い出。

折れそうに細い手足を懸命に動かして、駆けている子供の姿。抱えればひよいと簡単に持ち上がってしまうほどに痩せた体軀。目はきらきらと輝いて、見るもの全てを一心に見つめていた。

「美辞麗句だと君は嫌うかもしれません。けれど、わたしは君のその真心が本当に好きだった」

自分には出来ない。考えすぎてしまう。いくつもの欲を聞き、ひとの声を聞き、そして周辺の状況を確認して判断する。目の前のものだけを見てまっすぐに駆けていくことなど出来はしない。視野が広ければ広いほどに、前に進むことには臆病になる。

ふ、と甘い香りが鼻先をかすめた。香煙が神子の方へたなびいた。煙の中の屠自古は何も言わず、ただ神子を見つめている。

「君のことも、わたしにはあこがれだったのですよ」

妻へ語りかける。煙の中に浮かび上がる屠自古は何も答えない。ただはにかむように微笑った。

「君は本当に人間でした。己の欲することに臆さず、恥じず、ごまかさない。わたしが子供の頃からずっと守りたい、救いたいと願ってやまないのはたぶん、本当は君の

ことだった。誰よりも君の内側に人間を感じて止みませんでした」

明るく笑い、ぐいぐいと人を引っ張っていき、欲しいものを欲しいと言い、邪悪に對しては怒り、不安や悲しみに泣くこともあり、時には自らの愚行の故に傷つくこともある。その行いの一つ一つが神子にはいとおしく、かけがえのないものだった。そのどれもが自分にはないものであこがれた。

「わたしも君のようであれば、と思いました。けれどそれはどうしても出来ないことだったのです」

もしも笑うなら何故自分が笑っているのか、そのメカニズムについて考えてしまう。何かを欲するならばその欲望が社会正義に照らして正しいことなのかを検討してしまう。人を邪悪と断じたとしても自らの内側にその人に似たところを見いだしてしまう。不安や悲しみが生じたとして、それを前向きに解消するため泣いている場合ではないのだと自分に言い聞かせて無理矢理にでも納得させてしまう。

そして、何よりも、愚行をする勇氣がない。

「わたしは臆病なのです。先の見えないことが出来ないが故に、考えて準備をしてから全ての行動を実行する。だから自分の考えられる範疇でしか行動しない。うまくいかない可能性の高いことを、蛮勇をもって為すことが出来ない」

なまじ能力の高いことが災いした。この世の先を見通すことができるということの意味。

もしも無限遠方を見ることが出来る望遠鏡が存在するならば、宇宙のほとんどを暗黒物質が占めていることを見いだすだろう。夜天を埋め尽くすかのような星々などは、宇宙全体にとってみれば偶然か奇跡のようなのだと知るだろう。

目が見えれば見えるほどに、夜闇の深さは増すばかり。

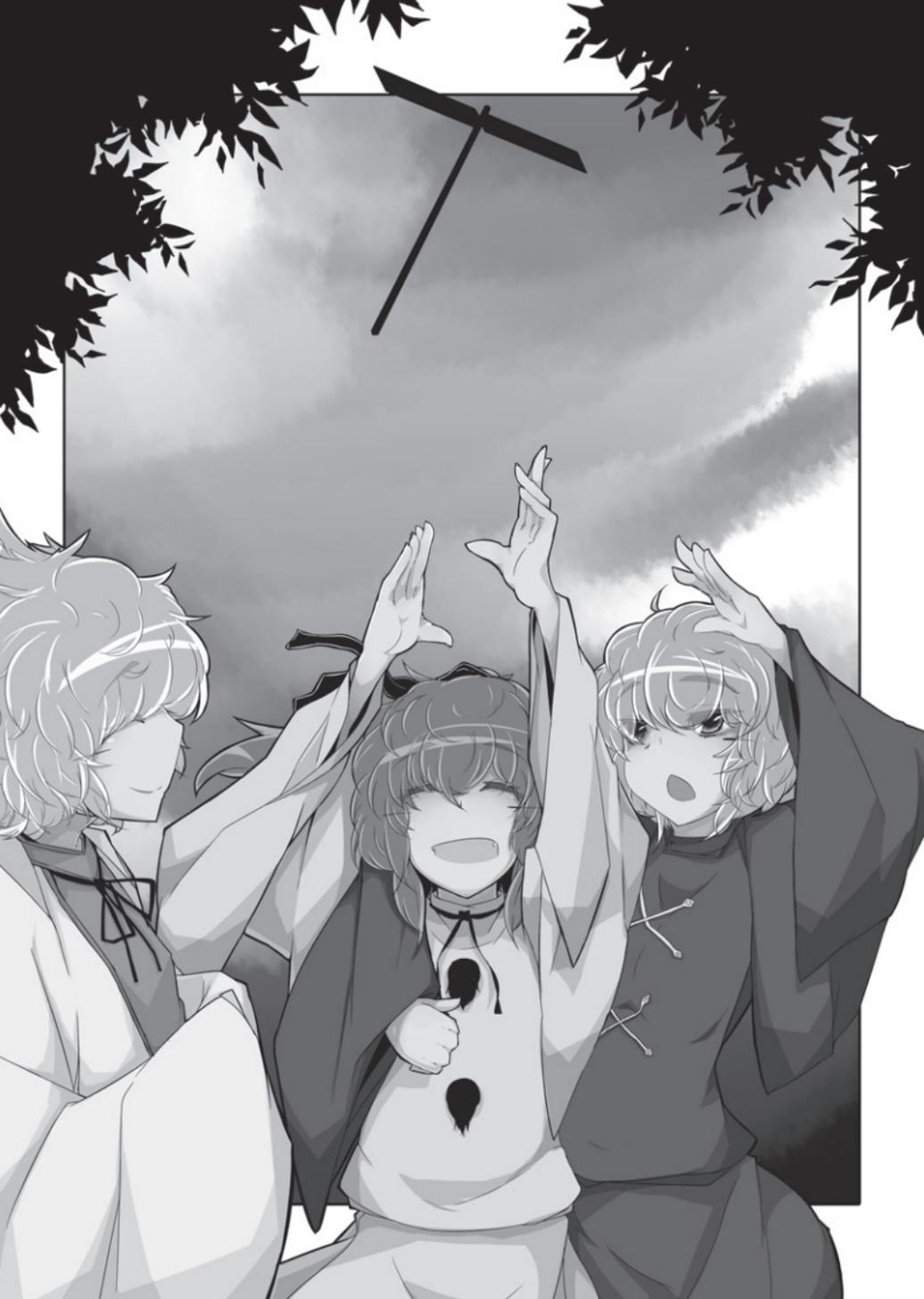
「だから、わたしは君たちに会えたことをとても感謝しています。君たちと共に過ごした日々はわたし一人ではなしえなかったこと」

かけがえのないことをたくさん思い出す。そうして生まれてから今まで、自分の身に起きたことを振り返ることもまた、一つの修行の形だった。

友と駆ける野山。渡来人の手すさびを真似て作った竹蜻蛉^{たけとんぼ}。

手のひらで挟んで回して飛ばす。両の羽を回して晴天を上がっていく。
まぶしい笑顔。子供たちの笑い声。

ただ飛んでいくだけで愉快で、楽しくてそれだけで時が過ぎていた。



日は沈む。永久に続く光はない。秋風は驚くほど強く、蜻蛉すら驚かせる。寄る辺を求めてかの物は惑う。差し出した指に触れたかと思えばすぐに飛び立つ。

暮れゆく日の元に取り残される。秋津あきつの羽が差す夕陽に光る。

そして暮れなずむうちに闇に染まる。

日々は北斗の如く巡り、ただ自らだけが天の北極のごとく孤独で不動である。



そして夢から覚める。

現実の日もまた暮れようとしていた。冷え始めている身体をぶるりと震わせて、神子は帰路につく。星は凍てつく光を伴って夜の闇の中にあり、山々は音もなく暗がりの中に潜んでいた。

宮に着く。山背が出迎えた。

「お帰りなさいませ」

少年は浮かぬ顔つきをしていた。神子は凝然とそれを見て、何があったのかを理解した。今日一日のこと、山背が心ない人々によって受けた嘲りあざけや悪い噂のことなどについて、一瞬のうちに把握してしまったのである。

「君は、わたしの子ですよ」

そう声をかけると山背は目を丸くした。

「父さま」

「大丈夫。誰がなんと言おうと、君は君自身のはたらきに誇りを持ってばよいのです。誰がなんと言おうと、わたしは君を屠自古と共に育てたつもりです。わたしたちの魂は君の中に確かに息づいているはずですよ」

神子はそう言うと、静かに笑んだ。そうしつつ、自分のことを棚に上げて、気安く

そのようなことを言える自分をひっそりと嫌悪した。自分が何を為そうとそれが正しいということの確信が持てないのは、神子自身が一番よく分かっていることだった。

山背は小さくかぶりを振った。

「わたしは、父^てさまのように立派にはなれません。どうしても人を憎く思う気持ちが避けられません。それとともに自分自身を憎む気持ちが現れては消えないのです」

「そうですか。それでは、こう考えなさい。君が君自身を憎むのは、君を愛している人を憎むのと同じことです。君のことを大好きな友達を裏切るということなのですよ」
神子は、この頃は、布都が自分をおいていった時の気持ちを、そう考えるようにしていた。

あの時、自分は確かに死ぬのが怖かった。そしてそのように臆病な自分を恥じてもいた。布都はそんな自分を叱ってくれたのである。真の友でなければあり得ないことだったろう。

「たくさんの友達を作りなさい。きっと、友達が君を救う」

自分が山背の友となれたならばどんなにか良かったろうが、もはやそのようなことは出来ない。自分に行かねばならない。旧友との約束を裏切るわけにはいかないのだ。
「はい。入鹿が良い友になってくれます。きっとわたしが成人したときには良い

支えとなつてくれるでしょう」

山背はしゃんと背筋を伸ばしてそう答えた。

神子は小さくかぶりを振った。唇が震えないように、出来るだけ落ち着いて話すようにした。彼に向けて、入鹿が君を殺すのだなどと、言えるはずがなかった。

「……他にもたくさん友が必要でしょう。君はもっと大きくなれる。友達はたくさんのかげがえのないものを与えてくれるのです」

「でも、父^{てと}さま。わたしは入鹿のことが大事なのです。あの子はかんしゃくもちなのに泣き虫で、だれもあの子の友達になってあげることが出来ないのです。だから誰かが、いえ、わたしはあの子の友達になってあげなければいけません」

「それは、りっぱなことです……」

「入鹿は、わたしが他の子と仲良くしていると、すぐ不安になってやきもちをやいてしまうのです。同じ年の遊び相手がなかなかないなかつたせいでしょうか。わがままや意地悪を言つて、わたしを困らせることも多い。それでも友達なら裏切ることは出来ませんよ」

きりりと顔を引き締めて、少年は言い切った。

神子は何か言おうとして、そのどれもが口から出ることがなかった。

何か言えば、それだけでこの先のことをゆがめてしまふだろう。そればかりか、近いうちに死ぬ運命さえ覆してしまふかもしれない。延々三十年も天命を伸ばし続けてきたように。

そればかりではない。何か言うのならば、それは真摯な言葉でなければならぬ。そうでなければ山背に対しても正しさを失することになる。山背のためというよりは、自分自身のために正しい言葉を紡がねばならなかった。

深く長いため息の後で、出たのはただ相づちだけであった。

「そうですね」

神子は静かに何かを諦めた。そうすることが正しいことのように思われた。

それは山背を捨てたということに他ならない。子を守るのが親のつとめなのだとするならば、神子はそれを止めた。そのように切り捨てたことを恥じる気持ちは生涯消えることがないだろう。

——生涯。そうか。

布都のいないこの三十年、おめおめと生き恥をさらしてきたと思ってきたが、自分は復活した後もまだまだ生きるつもりなのか。

——ああ、無論そうだ。永遠を手に入れるためにひとたびの眠りにつくのだから。

自分の浅ましきには呆れるばかりだ。仏道の求める無欲さとは程遠い。この三十年、自分は民を騙して仏の道を説いてきた。それは罪深いことである。自覚してなお、人を救いたいという欲望は果てることがない。

自嘲の笑みをかみ殺して、神子はその場を離れた。

夫婦の寝室は一つである。屠自古の身体はそこに静かに横たえられ、十五の頃から変わらずに眠ったままでいる。神子はその手を握り、しばしの間瞑目する。そして心の波を落ち着けて、灯火を消して今ひとたびの眠りについた。

本作品は、
御祭長屋『此処はきつと優しい詩』
2011年12月30日 コミックマーケット81
への寄稿作を、電子化したものです。
公開にあたり、一部表現を修正しております。



Project Shrine Maiden FanZine

上宮聖徳法王薨去 じょうぐうほうとくしょうおうこうきよ

2014年1月1日 電子書籍版公開

著 者 水之江めがね
発 行 ぼたぼた焼
イラスト 妹尾在処 (在リヤ)
DTP moki (heri/hodie)
原 作 東方Project (上海アリス幻楽団)

本作品は二次創作であり、原作とは一切関係はありません。
私的利用を超える範囲での複製、および、無断転載を禁じます。
autumn_kite[at mark]yahoo.co.jp
<http://i0-0i.sakura.ne.jp/harmonia/>